

西郷山

代官山界隈今昔

とみながあつし



西郷山 代官山界限今昔記

第一章

昭和十年代、代官山のあたりはまったく閑静な郊外の一郭だった。東横線の駅のフォームがすこし湾曲しているせいもあって、当時はせいぜい三両編成の電車が停まれる長さしかなかった。駅の南端はトンネルになっていて、渋谷区と目黒区を隔てる尾根道に当たる旧山手通りの下を電車が通り抜けていた。その路脇の地下を玉川上水がかなりの水量で流れていた。代官山は一列車あたり三、四名の乗降客しかいない、どちらかといえどかなり鄙びた駅だった。

渋谷駅の周辺は名前の通り、渋谷川の水脈に沿った谷間の低地で、東西方面には山や丘や台の地名のつく高台がっらなっている。北東の青山、南西の桜丘、鉢山、南平台、代官山などがそれだ。したがって東の宮益坂、西の道玄坂という結構勾配のきつい坂にはさまれている窮屈な地形の谷間、それが渋谷駅界限だ。

道玄坂を目黒方面にのぼったいちばんの高台は大坂上とよばれていて、当時の玉川電車の停留所があった。そこから三軒茶屋方向に急斜面を下ったあたりに、かつては明治政府高官の西郷従道の屋敷があったそうで、現在の青葉台、南平台、鉢山、代官山、猿楽町のあたりが西郷山と総称されていたようだ。昭和初期になにかの理由で西郷家が土地を手放すことになったようで、樹木に覆われていた広大な一帯を、例の堤康次郎一族の国土開発(旧箱根土地)が宅地として売りだすことになったらしい。

東横線にしても玉川電車にしても東急系だから、じつは西武系コクドとの熾烈な開発競争が、はやくもこの渋谷・目黒の一帯でもくりひろげられていたということだ。そもそも軽井沢別荘地の開発からスタートしたコクドが都内でも宅地の造成・販売の事業に手を染めていたということだ。戦後旧宮家や華族の土地をつぎつぎと入手して、天皇家の菊の紋章を模したロゴとプリンスなる名称を大々的に売りだした西武には、残念ながら都市空間のデザインに関する構想が欠けていたようだ。

東横線の田園調布、小田急線の成城学園の町並みと桜並木、駅前の整備状況に比較して、西武系の小平一橋学園、大泉学園の駅周辺は、駅前の広場や道路の配置などにはこれといった特徴的コンセプトが感じられない。というよりは、金儲け主義ばかりが先立って、開発にあたっての長期的視野やヴィジョン、芸術造形的なセンスが存在していないというべきであろう。例外的なものにJR国立駅前の大通りの桜並木があげられるだろうが、西武線とは直接関係のない地域で、どこまで直接コクドがかかわっていたのかあきらかでない。

西郷山の地名を知っているひとはあまりいないだろう。いまはわずかに陸橋の西郷橋と青葉台の西郷山公園になごりをとどめている。昭和十年代西郷橋から目黒の方へすこしくだった道ばたの木立のあいだに、ひっそりとお地蔵さまが祀られていた。ひとづてに聞いた話では、何人もの嬰兒をなにがしかのおカネつきでもらい受けた男が、養育せずにつぎつぎと殺害して、林の茂みのなかに埋めるというむごたらしい事件がおこったそうだ。その現場の傍に供養の地蔵が建てられたのだということだ。

つまり昭和のはじめのころには、代官山に近いこのあたりは、まだ人目につきにくい鬱蒼とした森だったということだ。その後の東京の変貌ぶりは、まさに目を見張らされる

ものがある。

戦後すぐのころ、芝の増上寺の裏山に若い女性を殺害して放置するという猟奇事件がおこった。犯人は小平義雄とかいう男だったので、「小平事件」としておおいに騒がれたものだ。このおとこはほかにも何人も女性を、お米を買えるところに案内してやるなどとことばたくみに誘いだし、殺害して死体を遺棄していたことがわかった。そのなかにもんぺ姿の死体があったということが、新聞紙上で報じられ、なぜか印象ぶかく記憶にのこっている。衣食住をはじめとする物資が極度に欠乏していた当時の状態を、強烈に思いださせるものがある。

当時の増上寺境内はいまよりかなり広く、現場は現在の芝公園か東京タワーの聳えるあたりだったように覚えている。そのすぐ脇には、いまはこれもコクドがらみの高層ホテルが存在している。偶然の一致とはいえ、こどもの死骸が埋められていた西郷山のぼあいも、増上寺周辺のぼあいも、かつては昼日中でもあまりひと気ない森や林で、そこを開発して、一大商業・住宅街に変えていく西武流事業の軌跡がかい見られるともいえるかもしれない。眼のつけどころがたくみで、先を見る目が肥えていたともいえるが、商魂のたくましさを思い知らされるものがある。

ところで、西郷山の事件のように、犯行の動機が戦前はおもに貧しさからのものであったともいえるのにたいして、戦後は身代金目あての幼児誘拐や、どちらかという小平事件のようにむしろ性的犯罪の要素が強い殺傷事件が多くなってきたところに、社会の時代相の変化を読み取ることができそうな気がする。かつての日本では、人工中絶は許されず、墮胎罪として罰せられたため、産んでも育てられなかったり、いわゆる間引きとして闇のなかで始末され、母胎を害する事例が頻発していた不幸な歴史を忘れることはできない。

第二章

東横線は始発の渋谷駅をでると、川沿いに恵比寿方向にしばらく走り、以前は八幡通り駅を過ぎて右折、山手の代官山方向にのぼっていく。この駅は渋谷駅と五百メートルほどしか離れていないため、たしか戦後まもなく廃止されてしまった。

ぼくは、十数年まえ東横線を利用して、所用で代官山にいったついでに、ひさしぶりで卒業した母校の猿楽小学校を訪ねてみた。すでに授業の終わった放課後の校舎はがらんとしていて、生徒たちの姿はなかった。教員室にはまだ人影が残っているようだったので、思い切ってドアをあけ、案内を乞うことにした。

校長先生は五十代前半ぐらいの女性だった。戦後に再建されたものと思われる鉄筋校舎は、すでにかかなりの歳月がたって、相当古びていた。しかし、思い出してみると、ぼくが通っていたころの木造校舎は、もっと老朽化したものだった。倒壊防止のため、表と裏に長く太いつっかい棒が立てられていたものだ。焦げ茶色の板壁は黒々として建築年代の古さを示しているように思えたものだ。

あのころは、鉄筋コンクリートの新館が右手に一棟だけあって、一階が図工教室、二階が裁縫教室になっていた。そのとなりに、戦争中父兄からの募金を集めて、プールがつくられることになったが、ぼくらの卒業後に完成したため、一度も利用することはなかった。以前の面影をほとんど遺していないながら、しかしどこかに六年間の在学時代をしのばせるものがあって、なつかしさが胸にせまってきた。

校舎に囲まれた校庭は、思いの外狭かった。ぼくのころは、一年生ときだけ男女別の二クラス、二年生以降は男女一緒の一クラス編成だったから、一クラス四十人として、およそ二百五十人ほどの生徒がいたことになる。毎朝授業のはじまるまえに、全員校庭に集合して、ラジオ体操をやった。壇上の校長先生と挨拶をかわしてから、おのおのの教室に向かった。ときには、たしか週に一度ぐらい校長の訓話があり、とくに厳寒のおりには、つま先が冷えて往生したものだ。防寒のため赤唐辛子を砕いて、靴のなかにいれたりしていたことを思い出す。男子生徒は冬でも半ズボンに短い靴下、銃後の小国民は頑健でなければならぬということで、薄着を強いられていたように記憶している。

当時は、ほとんどの生徒が、しもやけやあかぎれに悩まされていた。戦後はこうした現象がほとんど見られなくなったようだが、これも東京の気温が上昇したせいなのだろうか。それとも栄養状態や住宅事情が向上したおかげなのだろうか。あのころは冬中ぼくの家の池にも厚さ十何センチかの氷がはっていて、その上で飛び跳ねてもびくともしなかつたものだ。

各家庭の門口に置かれていた空襲時に備えての防火用水も凍結したので、ときどき氷割りをしなければならなかつた。その水槽のわきには、かならず竹の棒の先に藁縄の束のついた消火用の道具がたてかけられていたものだ。この藁束を水にひたして、飛び散った油脂焼夷弾の火を叩き消すという寸法だったが、じっさいの空襲ではまったく役にたたなかつた。なにしろ焼夷弾が雨霰というふうに落下して、つぎつぎに炸裂したから、とてもあちらこちらで着火した焔を振り払うどころの騒ぎではなかつた。

太平洋戦争がはじまるすこしまえ、それまでの猿楽尋常小学校という校名が、猿楽国民学校になった。昭和十六年十二月八日の開戦からまもない昭和十七年(1942年)一月から、昭和十四年以来おこなわれていた毎月の朔日の興亜奉公日に代わって、毎月八日が大詔奉戴日に定められた。その日全校の教職員・生徒は、金王八幡神社に掃除かたがた参詣に行くことになった。

戦時下の信仰の自由ならびに思想・信条の自由が認められていない時代のこと、クリスチャンの生徒も、無宗教の生徒も神社への参拝を強制された。しかし、ことの根幹は新憲法のもとでも、国家の政治と宗教と教育のかかわりをめぐって、戦没兵士の靖国神社への合祀などにも共通する、基本的人権問題が問われているといえるだろう。男子生徒は境内の清掃、女子生徒は社殿の雑巾がけ。それが終わると、社殿まえに整列して、戦勝と出征兵士の武運長久を祈願し、全員で一斉にかしわでをうってお参りした。

金王八幡神社は、渋谷駅から東へ少し坂をのぼりかけたところにある社で、一〇九二年もしくは一一〇〇年に創建されたものといわれている。もともとは谷盛庄とよばれていたこのあたりの領主、渋谷氏の館があったところだそうで、江戸時代には春日局が家光の將軍職就任を祈願し、その願いがめでたくかなったことで有名になり、元和元年に社殿と門が造営されたとの話だ。そのとき建てられた社殿がいまも残っていて、渋谷区内では現存する最古の建築物ということのようだ。

それにしても「金王」八幡という名称は、「カネ」の「王者」という一見ずいぶん欲張った名前のように思えるが、ことの由来は、跡継に恵まれず、出生を祈願していた旧領主渋谷氏夫婦に、金剛夜叉明王からのお告げがあって男子が産まれたため、金剛の金と明王の王をとって金王丸と命名したことによるとのことだ。その神社の脇に戦後、一攫千金をねらう競馬の屋外馬券売り場が設営されたことは、皮肉な因縁だ、

猿楽町ならびに猿楽小学校の名前がなぜついたかについては、はっきりしないところがある。在学時代に先生から教えられたところでは、弓の使い手で有名な八幡太郎義家が、塚のあるあたりで戦勝を祝って猿楽を舞った故事にもとづくとの話だった。ところが、それとはべつに、源頼朝がこの地で猿楽の舞を催したからだとの異説もあるらしい。しかし、金王八幡がこのあたりの氏神であるところから見ても、八幡太郎と八幡神社のつながりのほうが有力なようにも思える。鎌倉に居を構えて、みずからはあまり軍勢と作戦行動をおこさなかった頼朝よりも、東北地方から関東一円で、盛んに合戦に勝利した源義家のほうが、じっさいにこの地に歩を進めたということがありそうに思えるが、いかがなものだろうか。

親切に対応してくれた校長先生に別れ告げて、ぼくは西郷橋方面に足をむけた。

第三章

わが家があった旧山手通りの様子もすっかり変わってしまっていた。代官山駅に近い大通り沿いの、かつては朝倉なにがしとかいう米問屋の屋敷があったあたりは、おくまったところに何本かの大木がのこっていて、その木陰のてまえ一帯が、有名なレストランや喫茶店などが立ちならぶ、いかにもおしゃれなたたずまいのコーナーになっていた。横文彦の設計・デザインによる新しい都市空間、ヒルサイドテラスと名付けられた一郭だ。

以前とかわらぬ光景は、通りの両側に植えられているニセアカシアの街路樹が、えんえんとつづいていることだ。戦前は、この通りはアスファルトやコンクリートで舗装されることなく、四角い舗石が敷き詰められていた。その上を、目黒区側の大橋にあった輻重部隊の馬が、パカパカ快い音を響かせながら、行進していったものだ。ときには先頭の指揮官が、ひときは高い鞍のうえで、得意げな顔して通り過ぎていったりした。路上には結構ほかほかの馬糞が点々と残されていた。ちり取りとバケツをもちだして、その大量の落とし物を、孟宗竹などの肥料用にありがたく頂戴したものだ。

また駒場の旧制第一高等学校、いわゆる一高がちかかったため、夜おそくカタカタと高下駄を鳴らし、大声で寮歌を歌いながら通りすぎていく「学生さん」たちがいたものだ。わざと汚して古そうにみせかけた白線の入った帽子、ぼろぼろのマント、それが当時の最先端のエリート青年、旧制高校生たちのとびきりのお洒落だった。かれらの傍若無人のふるまいも、将来偉くなって社会の中核で活躍する若者の罪のない所業として大目にみられていたものだ。しかし、戦火の募るなか、かれらの多くがやがて学徒出陣して、各地の戦場で若い命を失うこととなった。

ヒルサイドテラスのは筋向いに当たる旧山手通りに面して、二階建てのギャラリーがある。ちょうどシャガールのリトグラフ作品展が開かれていたので、のぞいてみることにした。強烈な色彩の羊や馬や人間や花が、まるで夢の世界のように、まさに自由奔放に空中にうかんでいる作風は、何度見ても面白い。一階が喫茶コーナーになっていて、白で統一されたひろびろとした空間は、すがすがしい感じがしてころよかった。

この通りは、むかしはほとんど通るクルマもなく、ときにはキャッチボールができるほどすいていたものだ。代官山・猿楽方面から鉢山・南平台にかけては、華族の大邸宅がいくつも瓦をならべていた。第一商業中学のすこし手前に、旧御三家の一つ徳川侯爵の屋敷があり、戦後パンアメリカン航空の施設に使われていた。西郷橋をすぎて坂をのぼりかけたところに

は、琉球王家の子孫、尚侯爵の邸宅があった。漢那さんというもとの家老の屋敷が隣接していた。ワンブロックにわたる長い塀にとりかこまれていた尚邸跡は、取り壊されてマレーシア大使館になってしまった。

そのお隣のブロックが、もとは伊達伯爵の邸宅で、横町沿にここも長い塀がつづいていた。現在はドミニコ修道会の教会・施設になっている。この派は日本へは、すでに一七世紀の初頭、慶長のころに渡来したと伝えられている。フランスでは、古くからカタリ派などの異端派摘発と糾弾審問に長けていたそうで、そのせいと思われるが、ジュネーブでのプロテスタン・カルヴィン派とサヴォワでのカトリック派から離脱・離反して、晩年は独自の自然宗教を志向したルソーは、当時の貴族社会で幅をきかせたこの派の神父たちを、たいへん嫌っていたことが、たしか「告白」などの著書のなかで語られていたことを思い出す。

この教会のすぐちかくに、三木武夫記念館が建っている。たしか三木元首相の睦子夫人の実家は、戦前の十五大財閥の一つ、森コンツェルンの一族とかで、戦後、南平台・鉢山界隈にこの森家関係の方々の屋敷がいくつもできたように思う。そこからすこし渋谷駅よりのところに、山階鳥類研究所がある。その裏手に東京都知事になった美濃部亮吉の洋館の屋敷があったが、戦災で焼失、戦後しばらくのあいだは庭石だけが残存していた。

ぼくが六歳のときから二十五、六年住んでいた鉢山町の家は、まだ残っていた。のちに取り壊され、現在は二棟のマンションが建っているようだ。父が亡くなった後、すこしやかこしい相続問題もあって売りにだした。そこで震なにがしとかいう台湾の將軍の手にわたった。本人は台湾在住のため住むことはなく、代わりに日系の愛人の住居になったようだった。やがて、そのひとが経営するコスチュームの店になり、何人もの縫子さんたちの仕事場を兼ねて、しばらくは展示、即売場につかわれていたようだ。

西郷橋に隣接するお隣の家は、フランス料理のレストランになっていた。かつての住人A氏は、旧鹿兒島薩摩藩の重臣だったとかで、むかしながらの暮らしぶりが話題になったものだ。風呂は当主がまず先にはいり、男子が順番にすませたあと女性がいるということのようだったし、洗濯ものも竿の一番上に主人、つぎの段に男性もの、その下に女ものというふうに、上下の順番が厳格に守られているとの話だった。夫人がはやく亡くなられたとかで、ご主人の妹さんが一家の主婦がわりをつとめていた。お嫁に行くこともなく、一生涯独身でひたすら家をまもるべく献身的に世話をしているらしかった。

わが家も父は平戸松浦藩の武士の出ではあったが、母の実家が江戸の商家であったため武家の旧弊なしきたりは、もちこされていなかった。母方の祖母は料理上手で、ぼくら孫たちはよく手伝いをさせられたものだ。とくに正月のおせち料理のきんとんをつくるときや、お彼岸のおはぎをつくるときなどは、サツマイモの裏漉しやあずき餡を煮つめるときに、かならずかりだされた。また、二番目の姉が日本女子大の家政科に入学して、大岡昇平の叔母さんとかに当たる大岡女史から洋風料理を習ったこともあって、たびたびキッチンによびだされて、卵のあわ立てやボールの端を抑える役を命じられたりしたものだ。

母は無類の猫好き。父はどちらかというと犬好き。したがって、わが家ではいつもネコとイヌとが同居していた。いわゆる血統つきのシャムネコやペルシャネコでなく、純粋な日本種ばかりで、いちどは片目が金でもう一方が青の真っ白なねこを、はるばる湘南の片瀬・腰越の写真屋さんからもらってきたことがあった。変わり種もたまにあって、薄茶のクレールと名づけたとらねこは、さかなよりもきゅうりが好きで、台所からまないたのう

えでトントンときゅうりをスライスしている音が聞こえてくると、どこにいてもパッと身を翻して跳んでいく始末だった。しかし、上品なこのねこは体質的にも虚弱で、やはりどこか尋常ではなかったのだろう、わずかに才足らずで亡くなってしまった。その折は、無性に悲しかったことをいまでもありありと思いだす。

ふつうねこは愛想がわるく、自分勝手であるのにたいし、いぬは飼主に忠実で、ご機嫌をとったりするといわれる。しかし、ねこにもいろいろ個性のちがいがあって、あるねこは、旅行などでしばらく留守にして帰ると、ちゃんと玄関に迎えにでて、びよんびよん跳ねまわって喜びを表現するものもあった。しかし、やはりいぬの方が、主人の意向を覗き、敏感に感じとって、行動をとることは、たしかなようだ。おそらく、もともと猟犬として家畜化された飼育の歴史から培われた習性なのではないだろうか。

父の晩年、ブードルとコッカースパニエルの合いの子を飼っていた。真っ黒な縮り毛で、芸も覚えぬ、あまり利口とはいえないいぬだったが、気立てはよいように思えた。病気がちだった父は、べつに散歩につれだしたり、毛をすいたりするでもなく、また手ずから餌を与えるでもなく、とくにこれといった世話をしたわけでもなかった。しかし、父が家長であることはちゃんとのみこんでいるようだった。三ヶ月ほどの入院後父がなくなった。すると、このいぬは、きゅうに食事をとらなくなった。みるみる衰弱してゆき、獣医さんに手当てをしてもらったものの、父の葬儀終了後わずかに一週間で、主人の後を追うようにして死んでしまった。たぶん殉死したのだろうと、みなで話しあったものだ。

戦後渋谷駅周辺の人通りは、すっかり流れが変わってしまった。以前は閑散としていた宇田川町や大向方面が活気づいて、大勢の若者かあつまる繁華街に衣替えした。大向小学校の跡地に東急デパートが、また宇田川町には西武デパートや同じく西武系のパルコがそれぞれに大型の店舗を構えた。昭和初期における代官山・西郷山での東急対コクドの鞆当が、こんどは渋谷駅近辺で火花をちらすことになったというわけだ。

さらにNHKが麹町から移転してきたり、東京オリンピックを契機に原宿寄りに体育館ができたので、駅の北側に街の中心が移動することになった。しかし、翻って見ると戦前・戦中・戦後直後は、なんととってもにぎやかだったのは、道玄坂一帯だった。土曜・日曜には坂の両側に午後から露天の夜店が何十もならんで、バナナの叩き売りをはじめ、屋台や地べたにいろいろな品物を並べて、威勢のいい客引きの声がひびいていたものだ。

夏には浴衣がけに、蚊よけの団扇を手にして、小学生のころぼくは父のお供でよく夜店にでかけていったものだ。父の関心はもっぱら植木屋さんで、路地にならんでいる植木鉢の花や木を物色して歩くのがいつものことだった。あるときなどは、夜店の陳列品を全部買い込んで届けてもらったことがある。おかげで、わが家の庭のテラスは植木鉢だらけで、何十鉢もが列をつくってならんでいた。その水遣り係りが書生さんとぼくの仕事になった。

そのなかの白梅の盆栽と株分けした棕櫚竹の鉢を、ぼくは父の死後手元にひきとることにした。その後じつに五回にもおよぶ引越しのたびに、東京多摩ひばりが丘・世田谷池尻・横浜日吉・埼玉新座とわたりあるいたあと、現在は東京多摩・小平のわが家の庭にはるぼる人間とともに移住してきた。梅は地植えにして、いまは見上げるような樹に育ち、毎年花をいっぱい咲かせてくれている。西郷山の住人の時代から数えて七十年ちかい歳月、梅と棕櫚竹はたくましく生きつづけて、いわばわが家の歴史の生きた証人代わりになっているということが出来るだろう。

(完)